パフォーマンス心理学の挑戦：明日の認知科学に向けて
What Performance Psychology Challenges: Toward the renewed cognitive science

青山 征彦
Masahiko AOYAMA

成城大学　社会イノベーション学部
Faculty of Social Innovation, Seijo University
aoyama@seijo.ac.jp

概要

パフォーマンス心理学と呼ばれる新しい流れが従来の心理学、認知科学にどのような挑戦をしようとしているのかを概説した上で、明日の認知科学を構想する上でどのような貢献をなしうるのかを議論する。

キーワード：パフォーマンス心理学, ホルツマン、即興、コミュニティ

1. 概要

本発表では、パフォーマンス心理学（香川・有元・茂呂, 2019）と呼ばれる新しい流れがどのようなものなのかを整理しながら、パフォーマンス心理学がどのような挑戦をしようとしているのか、それは明日の認知科学にどのような貢献をなしうるのかについて議論したい。

パフォーマンス心理学とは、ホルツマンの提唱する方法論にもとづいて、日本の研究者が展開しているアプローチの総称である。社会文化的アプローチの流れをくむホルツマンは、ヴィゴツキーの発達の最近接領域の考えかたを拡張して、大人の学びやコミュニティの発達に用いている。その理論と実践は多方面から注目されているが、人間を今ある状態として捉えるのではなく、今の自分とは違う何者かになろうとしている存在として捉える点、やりかたを知ってから行為する存在ではなく、やりかたを知らないまま行為する存在として捉える点において、従来の心理学や認知科学とは大きく異なる人間観を前提としているのが特徴である。

ホルツマンの方法論をさらに独自のものにしているのが、個人の発達とコミュニティの発達は同時に生じるという見かたである。心理学においても認知科学においても、個人は周囲とは独立した存在として扱われることがまだまだ多く、コミュニティについては検討もされないのが普通であることを考えると、彼女の方法論が豊かな可能性を持っているのがわかるだろう。

このような考えかたにもとづくパフォーマンス心理学では、インプロ（即興演劇）のような演劇的な手法が、人間の発達を促す場になるとして注目されている。演劇の場では、人は今の自分とは違う人を演じることになるが、それは今ある自分を発達させる

ための発達の最近接領域になりうる。同時に、パフォーマンスは集合的であり、事前に何が起こるのかはわからない。その意味で、心理学や認知科学に根強く残る個体主義を超えつつ、即興的で状況的な私たちのふるまいにフォーカスできる方法として、演劇的な手法には大きな可能性がある。

こうしたダイナミックな関係は、実践の内側からでないと理解しにくい（茂呂, 2018）。さらに言えば、パフォーマンス心理学がねらうのは、すでに起きたことを分析する研究から、誰も見たことのない実践を生みだす研究へのシフトである。そのとき、研究者は実践を外側から観察する存在ではなく、共同のただなかでともに実践を産み出す存在へと変わっていく。

このように、パフォーマンス心理学には、従来の心理学や認知科学を大きく変革する可能性がある。本発表では、明日の認知科学を構想する上で、パフォーマンス心理学の方法論がどのような意味を持っているのかを論じたい。

2. 引用文献

[1] 茂呂雄二（2018）. 人間の学習. 青山征彦・茂呂雄二（編）スタンダード学習心理学, p.2-21. サイエンス社.
[2] 香川秀太・ 有元典文・茂呂雄二（編）（2019）. パフォーマンス心理学入門–共生と発達のアート. 新曜社.